
二人の反逆者

Neight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の反逆者

【Zコード】

Z3541X

【作者名】

Zeigert

【あらすじ】

目が覚めるとそこは…知らない天井だった。

どうやらやっていたMMORPGの世界の自分のキャラに憑依（？）したらしい。

それは取り敢えず良いとして……いきなりヘルモードは止めて欲しかったのだが…。

更新不定期です。

act · i escape (前書き)

初めまして、又はこんばんわ、N e · i g h t です。

また、思いついたものを見切り発車で： 1 1 1 0 r n
でも、内容は考えてありますので^ ^ ; ; ;

よろしかつたら読んでやつて下さー^ ^

今回の小説は“コメディ控えめのシリアス多め(?)”です。

それではどうぞ~

無口(笑)キャラを表現するのに懶と句読点多くしたのですが、後
で読み返してくどかつたので修正しました。

“フェイト オブ クロニクル”

MMORPGであるこのゲームは、サービス開始から五年目に差し掛かった今でも、一位の座を譲らない程の人気を誇る。

複数ある種族、年齢、顔、体型等、好きに選べる自由さに加え、ミッションやクエストを進める事によって自分のペースでゲームのナリオも見る事が可能である。

種族は始めの内万能型の人間

俊敏性が高く攻撃力もある獣人族

器用さが高く魔法も得意な長耳族^{エルフ}・の三種族から選択する事になる。

レベルを上げ、LV100になると転生が可能になり、ステータス、スキルを受け継いだまま、再度LV1になる事が出来る。

HP、MPは7000、その他各ステータス上限は1000であり、転生を繰り返し続けると実質上上限を叩く事が可能になる。

転生する時点で全ステータスの上限を限界まで上げていると、上級種族に転生する事が出来るようになるのだ。

攻撃力が高く魔法が使えない代わりにブレスを使える竜人族。

水を操り水中戦になると無類の強さを發揮する魚人族。

そして多彩なスキルを身につける事が可能な魔人。

それぞれHP、MPは9999、その他ステータス上限が1500まで上げられる様になる他、特殊スキルも増えたりで、殆どのプレイヤーが上級種族になる事を目標にしていた。

しかし、魔人だけは非常に人気が無く、大抵の人は竜人族か魚人族になる人が多かった。

魔人になるまでにスキルは多く取得可能であり、新たなスキルの必要性を感じる人が少なかつたのである。

更に魔人の見た目が魔族：このゲームの“敵”である種族と見た目が酷似している為、プレイヤーに誤って襲撃される可能性が高い事を理由に進んで選ぶ者はいなかつた。

その見方は、あるプレイヤーが魔族との戦時に参加した時、180度変化する事になる。

バージョンアップが行われた後の初めての防衛戦の時。

魔族が攻めてくる中で無類の強さを發揮したのだ。

様々な武器を扱い、攻撃しながら高速詠唱で広域殲滅魔法を唱える魔人。

毎度苦戦しているこのイベントが1人のプレイヤーによって、わず

か十数分で片付いた事例は今までに無く、この事をきっかけに魔人^{フィンド}は人気種族になつたのだが…。

：会得できるスキルがあまりにも膨大で、操作の難易度が高く、已む無く断念する者が後を絶たなかつた。

一年近く経つた今でも、魔人は、片手で数えられる数ほどしかいなかつた。

そして、誰も“彼”を抜かす事はできなかつた。

「……此處は、何処だ」

目を覚ますと、知らない天井が広がつていた。

寝る前、俺が最後に見たのは何もない白い天井だつたはずだ。

決して天蓋付きのベッドではない。

まだ寝ぼけ気味の回らない頭をフル回転させ、状況を少しでも理解しようとしてみたが…

余りの唐突な出来事についていけない。

ただ“誰かが此處に運んだ”のは間違いない。

俺は昔の事故で下半身不随になつたはずだからだ。

それ以来外出する時は必ず車椅子が必須になり、必然的に家にいる時間が圧倒的に増えた。

どちらかと言うとアウトドア派だった俺は、当然暇を持て余す様になつた。

そんな時、友人から進められたのが“フェイト オブ クロニクル”だった。

最初は勧められるままやつてみたが、俺はすぐに嵌まり、所謂ネットゲー廃人になつた。

元々RPG系はゲームの中で好きな分類だった。

ゲームの内容も操作方法も結構好感が持てるモノで、飽き性の俺でも続ける事ができた。

俺は何度か転生させ、魔人になる事ができた。

魔人は肌が白く、耳が長耳族より短く、斜め上に尖っているのが特徴的な種族だ。

よく魔族と間違えられるが俺はそうは思わない。

魔族は横に尖つた耳を持ち、額から角が出ている。

魔人^{フィンド}と長耳族^{エルフ}を足して割る一に角を付けたという風貌だ。

正直、長耳族とも似ていると思つただが。
エルフ

俺はレベルとスキルを上げ、転生を繰り返し、ステータス、レベル
共にカンストさせた。

それでも固有スキルやアビリティのある竜人や魚人族の方々が圧倒的に
強かつた。

しかし、一年前のバージョンアップによる“魔人”のステータス修
正と強化。

それにより魔人は全種族最強の名を欲しいままにしていた。

閑話休題。

…それにしても此処は何処だ。

ゆっくり起き上がり、辺りを見回す。

部屋の内装は実に豪華で中世的な印象を受ける。

そのまま視線を巡らせていると、ある一点で止まった。

そこには…良く知った顔があつた。

…いや、その顔より幼い。

ソイツは、俺の顔を見て目を見開いたまま固まっていた。

「嘘……だろ」

俺が思わず呟いた言葉。

ソイツは寸分狂わず同じ様に口を動かす。

当たり前だ。

ソイツは……鏡に映った俺のハズなのだから。

切れ長の……といつより吊り目氣味の深紅の目。

サイドロングで、後を一房だけ伸ばした癖の無い白銀の髪。

幼くなつたせいで身長や体格や顔立ちは違つが、コイツは

「俺の、キャラだ」

ぽつり、と呻いたその言葉は掠れていた。

震える手で恐る恐る顔に振れる。

認めたくなつたが、ちゃんと手の感触も触られている感触もある。

俺は確かゲームをしていたはずだ。

友人のクエストを手伝っていて……？

俺は如何してこうなったのか記憶を辿ろうとしたが、露がかかった
かの様に記憶が曖昧になっている。

色々と思い出そうとしたが、顔や今まで何をしていたのかは思い出
せるが…自分の名前、友人の名前などの一部が出てこない。

「…………つー？」

そのまま記憶を辿りつつした所で頭に激痛が走った。

目の前が闇に塗り潰される。

俺はそのまま起こしてこる上半身をベッドに倒れ込む形で意識を手
放した。

『お前は、呪われている。

本当は……今直ぐこの手で消し去りたいのだが』

……何ですか？

僕……何もしてないよ。

『“存在する”それがお前の罪だ

……じゃあどうすればいいの。

僕は何をすれば良いのか分らないです、父上。

『この部屋から一生出るな、この“裏切り者”が

“裏切り者”？

ああ、待って、行かないで下さい、父上。

どうこう意味なのか教えて下さい。

『…いつも呼ばれる理由…教えてよ』

母上…?

お願いします。

『……それはお前が魔人マジンだからよ、汚らわしい

…何だつたんだ今のは。

俺は再度起き上がりながら頭を抑えた。

もう頭痛はしないが、訳の分らない夢を見た。

だが、普通の夢とは違ひ気がする。

…いや、今はそんな事を考へてる場合ぢゃない。

とにかく今の状況把握しなくては

俺は起き上がり、ベッドから出た。

足が動かせる事に感動しながら部屋を物色する。

見た目が豪華な割には物が思つたよりも少なかつた。

目立つ物が机と本棚位しかない。

机には何も無かつたので、本棚を調べる事にした。

とりあえず、埃が溜まつてゐる本は後回しにして無い物を探す。

使用頻度が高い程、手がかりになるのじやないか、と思つたからだ。

日記等が隠してあるのなら、マメな人なら毎日書く。

… といつ事は埃が溜まりにくいはずだからだ。

そう思いながら探してゐると、丁度手の届く範囲内で怪しい本を見つけた。

それを手に取り開いてみる。

「…モンゴ」

俺の予想通り日記りしき物があつた。

ミミズがのたくつた様な文字で書かれているが、何故か俺には読めた。

その事に疑問を感じながらも、とりあえず初めから読む事にした。

【×××月××日】

今日は、前に言われた“裏切り者”について調べよつと思つ。

母上は魔人マインドとも言つていたけれど、何か関係でもあるのかな……？

【×××月××日】

何日か、1日数時間ずつこつそり抜けて図書室に行つて調べた。

やつと手がかりがありそつな本を見つける事ができた！

早速魔法で複製して持ち帰つと思つ。

【×××月××日】

…本を読んでみて、どうして父上達が僕の事を嫌がるのか分つた気がする。

父上は数百年前、一度人間達の言つ“勇者”に殺されたらしいんだ。

メンバーには、大剣使いの人間ヒューマン、弓使いの獣人族ワーピースト、治癒師の長耳族エルフ、

珍しい竜人族や魚人族もいたらしい。

そして…その中に魔人もいたみたいで。

当時、魔人は魔族にとつて神様みたいな存在だつたらしいんだ。

だから、裏切られた気がしたのかな。

それに、本に写真が載つていたんだけど…その人は驚く程僕に似ていたんだ！

…いや、僕が似てるのかな。

そして、僕は調べ続けて知つた事がある。

それは

此処から先は書かれていなかつた。

日記をパタンと閉じて、机の上に置く。

嫌な予感が頭を過つた。

“此処は魔王の住処じゃないのか？”と。

“ といえば、夢の中に出てきた“父上”に見覚えがある。

半年前に倒した“魔王”としてだが。

…もし、本当にそうだったとしたらまずい事になる。

“魔王”は次元が違すぎる。

当時、一番強かつたプレイヤーを揃い集め、作られた玄人メンバー6人で行つてギリギリ。

もし1人で挑んだら…ただの俺が勝てる訳が無い。

…此処から早く逃げ出さないと危険かもしれない。

だが、焦れば逆に失態する。

俺は恐怖で強張る身体から力を抜き、深呼吸をする。

…分つた事を纏めるか。

まず、この世界は“フェイト オブ クロニクル”である可能性が高く、“魔王”が倒されてから数百年経つている。

更に、その倒した内の1人が俺の可能性が高い。

魔王を倒したのは俺達のメンバー以外は達成できていないからだ。

そこまで考えて分らない事が出てくる。

この身体の持ち主は一体何者なのか。

俺が見ても本当に見た日年齢が違う以外は似ていろと想つ。

俺のキャラは18歳設定で、この身体は…15歳ぐらいだろうか。

まあ、此処が“良くな似たパラレルワールド”だつたら、推測した所で殆ど無駄になつてしまつんだろうが。

俺の知識を使って勝手な推測を立てても意味が無いだらう。

…とりあえず、日記から入手できるのはこれ位か。

後は此処から逃走できる方法を探せばいい。

幸いな事に、どうやら本棚にはスキルブックが沢山ある様だ。

それを読んで、見つけ出せば良い。

計画を実行するまでは、きっと…“魔王”は来ないはずだ。

そう自分に言い聞かせ、俺は再度本棚に手を伸ばした。

act · 2 escape 2 (後書き)

『所持品』

【田記】…途中書きの誰かの田記。

new!

本棚には、幸いな事に使えそうなスキルブックが沢山あった。

ゲーム内ではお世話になつた本だが、実際に目にするのは初めてだ。どうすればいいのか分らなかつたが、普通に読むだけで習得できるらしい。

原理は分らないが呪文を唱えるだけでスキルが発動する。

詠唱破棄もしてみたが、何の支障も無く使う事ができた。

詠唱破棄はスキルを極めないと使えないはずなのだが…。

不思議に思いながらも、とりあえず脱出に使えそうな【広域感知】
中級【認識阻害】中級【複製】中級【治癒】初級【飛翔】
初級【瞬間移動】初級【収納】初級【】を先に覚えた。

本来なら覚えるまで時間がかかりしそうなものが、魔人フインドは【速読】
【記憶力】【早熟】等、スキルを覚えるのに適した特殊スキルを保
持している。

どうやらそれが発揮されたようだ。

【広域感知】は範囲内の相手の位置、地形等を調べる事が可能にな
るもので、使ってみると脳裏にマップと白い矢印、赤い点と小さな
三角形が表示された。

白い矢印がある位置からして俺を表している様だ。

赤い点はきっと魔族の位置で、二角形は向いている方向だろう。

中級なので全体までは把握しきれないが、そこそこ広範囲表示されている。

マップを見ていると、隠し通路まで表示されていた。

【瞬間移動】の初級は“見える範囲内まで移動可能”なスキルだ。
移動範囲はかなり狭いが、【広域感知】と組み合わせれば逃げる事
ぐらいは可能だろう。

【治癒】は初級だから気休め程度にしかならないだろうが、無いよ
りはマシか。

一通り覚えた後【収納】を使う。

これは自分以外使用不可の空間を創り上げるスキルだ。

初級だと重量制限が20キロだが、今は十分だ。

【複製】を使って、スキルブックを全て「ペーパーして、空間内に仕舞
い込んだ。

日記はまだあるか迷つたが…一応持つていく事にした。

本棚以外も使えるものは無いかと探すが、無かつた。

本当は食料等があると良いのだが、そんな都合の良い物がある訳がない。

…まあ、此処まで揃えれば行けるだろ？。

俺は、脳裏のマップに赤い点が表示されていないのを確認して…扉を開けた。

回廊は絨毯だが、できるだけ足音を立てない様に走る。

走つて分つた事なのだが、この身体のスペックは高い。

元の世界ならギネス記録を平氣で叩き出せる様な速さが出せる。

俺は改めて自分がゲームの世界に来てしまった事を理解した。

夢だと思いたい所だが、触れた感触、自分の心臓音、呼吸はそれを否定する。

現実だと認めるしかなかつた。

…いや、あまり思考に耽ると周りが見えなくなる。

そろそろ、魔族達がいるエリアに近いはずだ。

「…いるな

通路に一人、扉の前に立っている。

二人なら何とかなりそうだ。

俺は念の為【認識阻害】を使いながら、相手が気を逸らした瞬間【移転魔法】を使い、反対側に移る。

すぐさま「コーナーに身を隠すが、此方に向かっている音がしない事から気づかれていないうらしい。

…心臓に悪い、早く抜け出したいな。

【広域感知】を使いながら廊下を進み…つきあたりの右の部屋の中に入る。

扉をゆっくり閉め、額の汗を拭った。

見回すと、柱時計、テーブル、ソファ、クローゼット、タンス、ベッドがある。

…さて、この部屋の何処かが隠し通路につながっている筈だ。

まずは定番の柱時計の裏を…。

【飛翔】スキルを応用し、柱時計を浮かす。

…無いな。

一通り壁を見たが外れたようだ。

他也順に調べたが何も見つからない。

最後にクローゼットを見ようとした時、脳内で警報が鳴った。

一瞬狼狽したが、冷静さを取り戻し【広域感知】を使う。

…誰かがこっちに向かって来ていた。

俺は咄嗟に【認識阻害】を使い、クローゼットの中に入り込む。

中は衣類が多く、隠れるのには最適だった。

フード付きのローブを一着拝借して被る。

気休めかもしれないが、クローゼットを開けられたとしても、多少は気づかれにくくなるかもしれない。

奥でしゃがみ込み息を潜めていた頃、扉が開く音がした。

…来たか。

早く行つてくれ。

俺は内心そう祈つたが、案の定そう上手くいくものじゃなかつた。

「あーあ、全く疲れたぜ」

ソファーに座ったのか、どすつ、といつ音と共に若い男の声が聞こえた。

「あんなの、もうやりたくないわ……って、ん……？」

クローゼットの内部を触れていると、取っ手の様な物があった。

コレは何だ…？

収納庫か…？

「ボタン…？」

黒色…まさか、感づかれたかっ！？

外の男から、素人の俺にもわかるぐらい濃密な殺氣があふれた。
全身が総毛立つ。

俺の着ていた服のボタンは黒だった。

落としたか…！？

「こらんだら、出て来い！…」

外では探し回っているのが分った。

拙い、このままでは見つかる…

一か八かで…此処に隠れるか。

暗闇の中、手元にあつた取っ手を持ち上げてみた。

俺はその中に滑り込む。

音を立てない様に、尚且つ素早く閉めたのと同時にクローゼットが開けられた。

「…ちつ、此処にもいねえ…逃げられたか」

男は苛々した口調で愚痴りながらクローゼットを閉め、部屋を出て行つた。

…何とか危機は免げたか。

安堵のため息が思わずもれる。

「……な

此処から出ようと戻を押したが…開かなくなっていた。

試しに引いてもみたが…ビクともしない。

どうじょうか考えている時、ふと、後ろから微風が吹いているのに気がついた。

再度【広域感知】を使う。

風の吹いている方向に向かつて道が延びていた。

「…もしかして、隠し通路なのか…？」

まさかこんな所にあつたとは。

見つかり方が見つかり方なので、運が良いのか分らないが。

しかし、進もうにも辺りは暗闇だ。

頼りは【広域感知】のみ。

スキルブックの中に【ライト】があつたかもしれない。

…覚えておけば良かつたか。

俺は、内心で自分の失態に落ち込みながら、闇の中に、一歩踏み出した。

act · 3 escape (後書き)

『所持品』

【日記】…途中書きの誰かの日記。

【スキルブック】…様々な能力を取得する事ができる魔法書。あるだけ複製した。 new!

【ロープ】…何の効果があるか分らないロープ。フード付き。new!

act · 4 avarice1 (前書き)

背景色を変えてみました。
見づらい等がありましたら、教えてください。^-^・・・

カツン… カツン…

俺の足音のみが闇の空間に響き渡る。

アレから暫くの間、歩き続けたが一向に着く気配が無い。

【広域感知】を使っても、ただ一直線の道が在るだけだ。

マップを見る限り、どうやら敵はいないらしい。

…もしかして障害物も感知する事が出来るのだろうか。

ふと疑問に思った俺は、心中で「障害物感知」と呟く。

ファンツ

《障害物・無 20km先の出口まで直線・平坦な道》

マップの端の方にそう表示された。

カーナビみたいで…便利だな。

それにしても、直線で平坦か…走るか。

俺は口に向かつて駆け出した。

その後、何も起じる事が無く出口に着く事ができた。

今度は戸が開かないといつ事は起きず、ギイイ…と軋む音を立てながら開く。

繋がつている先は木造建築の古い家だった。

今にも崩れ落ちそうな壁を見る限り… そう保ちそうもない。

気配を探る限り、人は住んでいなさそうだった。

… こんな家に住む人はいないだろうが、鉢合わせは困る。

… ん？

何か金属らしきモノが足に触れた気がした。

足元を見ると金貨が二十枚程落ちている。

此方の硬貨は半銅貨、銅貨、銀貨、金貨、白金貨、で成り立つている。

半銅貨が10G、銅貨が100G、銀貨が1000G、金貨が10000G、白金貨が100000Gだ。

元の世界とは価値観が違つ為一概には言えないが、 $1G = 1\text{円}$ として考えれば分りやすい。

此方の世界では装備に非常にお金を使つので端金だが…まあ、念の為持備しておくるか。

とつあえず、落ちてこる金貨を拾つとポケットの中にしまう。

外に出ると鬱蒼と茂る森に出た。

…この家、追つ手が来る可能性がある事も考えて壊しておいた方が良いかもしね。

そつ思つた俺は、空間から【ファイア 中級】と【地形操作 中級】のスキルブックを取り出す。

特殊スキルを使い、10分程で2冊を速読して覚えた。

中級程なら、問題無く燃やしきせやつだ。

「【ファイア】…

手を上げてそつと、指先がほんのり紅く光る。

次の瞬間、炎はすぐさま家を包み込み…跡形も無く燃やしきへつてしまつた。

炎の勢いは周辺の木々まで燃やす勢いだつたのだが、俺が魔力供給を止めたのと家が木と隣接してなかつたのが幸いだつたのか、炎は不自然に消滅した。

：次に脳裏で先程の通路を消し去る想像をすると、地面が盛り上がり、生き物の様に蠢き始めた。

あつという間に只の更地になる。

俺はその光景を啞然としながら見ていた。

：ゲームの中では此処まで威力は凄まじく無かつた筈だ。

今を見る限り、明らかに上級を超えた威力を発揮している。

：もしかして、此処に来るまでに覚えたのも同様かもしれない。

比較しにくいモノばかり覚えたので、気がつかなかつただけなかもしれないが。

更に疑問が増えたが、都合が良いので後で考える事にする。

「さて……これから何処に向かおうか……」

確か、ゲーム内では“ギルド”があつたはずだ。

“ギルド”は、冒険者を束ねる為にできた組織だ。

昔、荒くれ者達が自称で冒険者と名乗つており、本職の人達が困つていたらしい。

そこで、組織されたのが“ギルド”だ。

“ギルド”に加入すると、自分の能力を数値化したカードが貰える。そのカードは本人と認識した人が魔力を流さない限り、名前とランクしか表示されない様になっている。

因みに、ステータス詳細は“ギルド”にも分らない…と公式の解説に書いてあつた筈だ。

その通りなら…作る時に懶々能力を隠す必要が無くて助かる。

“ギルド”に所属すると、特典はソレだけではない。

加盟店ならばカードを提示しただけで割引が効き、更に好きな国に所属する事ができる様になる。

クエストも受けられる様になる筈だ。

デメリットの方が少ないな…一応所属しておつか。

【広域感知】を使って、町を探す。

マップには表示されていないが、13km先にそこそこ大きな町があるらしい。

とりあえず、その町に向かう事にした。

森を抜けると、城壁の様に聳え立つ強固な壁の奥にファンタジーでは良くある中世的な建物が並ぶ町並みが見えた。

だが…明らかにこの町は見覚えが無い。

【広域感知】を使い、この町の名前を調べる。

アヴァリスの町

俺の感は当たつていた。

俺はこんな町は知らない。

俺がゲームをやっていた時より数百年経つていろいろなから、その間にできた町なのだろうか？

町に入る前に【変装 初級】を覚え、使つ。

これで一般的なローブを着た普通の魔法使いに見える筈だ。

流石と言つべきか、魔王の城にあつたスキルブックは種類が豊富で助かる。

フードを深く被り直し、門前にいる門番ひりしき鎧に近づく。

「…ん？ 町に入りてHのか？」

「…ああ、通して貰えないか」

俺が言い返すと鎧は厭らしい笑みを浮かべ、笑い始めた。

何が可笑しいのか全く理解できない。

「おめえ、何にも知らねエ田舎から来たんだな！」

当たり前だ。

俺はこの世界の住民ではないし、知つても数百年前の事だけだ。

「この町は、アヴァリス様が納める町だ。

ここを通りたけりや、アヴァリス様への納金として金貨一枚ぐら
い寄こさねエと通せねエぜ？」

「まあ、お前みたいなのは出せねHだらつが」と鎧は下品に笑い
ながら、見下す様に此方を見てくる。

「……これで良いだろ？」「

俺はポケットから金貨を一枚取り出し、鎧に向かって指で弾く。

鎧は思つてもいなかつたのか、飛ばされた金貨を慌てて取り、啞然としていた。

「あ、ああ……」

鎧は受け取つた金貨を幻でも見るかの様に、まじまじと凝視している。

たがが100000Gガルだが……どうかしたのだろうか。

俺は少し疑問に思つたが、深くは考えず門に一步踏み入れたのだった。

act . 4 a v a r i c e 1 (後書き)

『所持品』

【日記】：途中書きの誰かの日記。

【スキルブック】：様々な能力を取得する事ができる魔法書。あるだけ複製した。

【ロープ】：何の効果があるか分らないロープ。フード付き。

【金貨】：一枚10000G。ガルド 20枚程拾った。new!

門をくぐり一歩を踏み出すと、思った以上に賑やかだつた。

人通りも頻繁で多人数で行動すると逸れてしまうかもしれない。

暫く大通りを歩いていると、太陽が視界に移る。

太陽はいつの間にか随分西口になつていた。

「……ギルドは明日にして、宿を探すか」

登録にどれ程かかるか分からぬ。

日が暮れるまでに宿が無ければ、最悪野宿の可能性もある。

野宿だけは避けたい、そう思つた俺は宿を探す事にした。

出来れば料理が美味くて小綺麗な宿が理想的なんだが。

余りにも酷い宿だと、持ち物を盗まれる可能性がある。

特に服は取られると拙い。

【変装】で表面上誤魔化しているが、あくまで表面上だ。

上級のスキルブックがあれば種族や人相、触れた時の手の感触まで

誤魔化せるのだが、初級だと色と大まかな変化しか変える事ができない。

魔王城から拝借したので当たり前だが、この服は触り心地からしてかなり高価なモノだと分かる。

【変装】を見破れる奴から見ると、俺は良い鴨だろ。

服は一着しかないの、盗まれると特徴のある耳が隠せなくなり、俺が魔人だとバレてしまう可能性がある。

この時代、魔人に対するイメージがどういうものか分らないが、良いモノではない可能性も否定できない。

暫く、さり気なく宿の前を通り過ぎたりして建物内と料理の香りを調べるが、良さそうな宿が見つからない。

もう一度【広域感知】を脳裏に思い浮かべた時だった。

マップ内に赤い点が一つ表示されていた。

この町を歩いていて気がついたのだが、一般人はどうやらオレンジ色で表示され、“俺が相手に警戒心を抱いているか逆の時のみ”赤色になるらしい…ゲーム内の仕様とかなり違っていた。

俺は気づかないフリをして進む事にした。

此処…町内で揉め事でも起こすと面倒になりそうだからだ。

とにかく撒くに限る。

そのまま大通りを進むと、赤い点は一定感覚を空けてついていく様だ。

俺は人込みに紛れ込む様に動き、そのまま細い路地に身体を滑らせた。

二つの点は突然標的を失つて動搖してゐるのか、マップについている矢印が右往左往する。

暫くして二つの点は諦めたのか、来た道を戻つていった。

逆に彼らを追つのも良いが、深追いし過ぎて危険に晒されるかもしれない為、放つておくのが良いだろ。

俺は表の大通りに戻るつと踵を返そつとして…固まった。

ロープが引っ張られている気がしたのだ。

一瞬、ロープが何かに引掛けているのかと思ったが、路地裏は道幅自体はゆうに大人二人が並んで歩ける程はある。

くいっ、くいっ

気のせいでは無かつた様で、控え目に再度引っ張られた。

頭だけ動かし、後ろを向くと、12歳程の少年が服の裾を掴んでい

る。

少年は俺が振り返ったのに気がつくとビクリと肩を揺らしたが、ぎこちなく笑った。

「…何だ」

「あつ、あの…」

少年は何かを言おうとしているのか口を開閉させるが、切り出せないのか視線を彷徨わせている。

俺は振り返り、軽く屈んで視線を合わせ、続きを言い易い様に表情を緩めた。

彼は弛緩したのか口ーブを握り絞める手が少しだけ緩む。

「良かつたら、僕の家に来ない？」

少年の一言は、願つてもない事だった。

粗末な服を着た淡い金色の髪と海の様に蒼い瞳を持つ少年は、先程の緊張は無くなつたのか、幼さの残る端正な顔は満面の笑みを浮かべている。

「お兄ちゃん、宿に困つてるんだよね？ 僕の家で良かつたら泊まつていいく？」

少年の言葉に裏は無いと思つた俺は、好意に甘えさせて貰つ事にした。

金はできるだけ使わず持つておいた方が良いだらう。

そう考へると、門前で渡した金は結構痛手だったのだが。

レイニーリオのローブの裾を掴んでいた手は、今は俺の上着の袖を掴み、路地裏を迷う事無く進んでいく。

暫くされるがままに着いていくと、一軒の建物に着いた。

「此処が、僕の家だよ」

かなり古い建物だという事が分かるが、掃除を忠実にしているのか、清潔感があつた。

レイニーリオはそのまま戸を開けて中に入る。

「…お邪魔します」

入る際立入り口のを忘れない。

レイニーリオは一瞬怪訝そうな顔でしたが、特に気にする必要は無いと思つたのか、聞き返さなかつた。

「おやまあ、レイニーが人様に懐くなんて珍しいのに家にまで連れて来るなんてねえ」

声が奥から響いてきたと同時に、老婆が現れた。

老婆は微笑ましそうにレイニーリオを見つめる。

レイニーリオは図星だつたのか、照れ臭そつに歯を尖らせ、そつまを向いてくる。

「…おばあちゃん、お兄ちゃんを泊まらせてあげても良いい？」

「アイツの部屋が空こてるだらつて、ルームを使つてもうりこなわこ」

「うふー、お兄ちゃん、行くひーー。」

「…ありがとうございます。」

「おやおや、若このに偉いねえ。…それでも、兄弟みたいだねえ」

ねえ

俺はそのまま服を引っ張られ、半ば強制的に連れて行かれる。

その途中、すれ違い様に軽く会釈すると、レイニーリオの祖母は微笑を返してきた。

「ねえねえ、お兄ちゃんの名前、何て言つの？」

部屋に着いた途端、質問された。

レイニーリオは目を輝かせ、じらじらの答えを待つている。

その質問が一番困るんだが…と、俺は顔をしかめた。

向こうにいた頃の自分の名前が出でこないのだ。

…ゲーム内で使用していた名前しか思い出せない。

だが、それを名乗っても良いのだろうか。

この時代の俺の立ち位置が分からぬ為、下手に言わない方が良いかもしれない。

…いや、敢えて言つてみる価値はある。

もし俺のが悪名として知れ渡つていたとしても、言つた相手は少年だ。

信じたとしても家族ぐらいだろう。

どの道有名だと、今後の行動にも関わつてきたり何かと面倒だ。

…できれば無名の方が都合が良い所だが。

それを知る為にも俺は口を開いた。

「シュヴァルツ・クラウテイス」

この世界では基本的に個人名しか持たない者の方が多い。

俺がラストネームを持つてるのは“名誉公爵”的地位に就いているからだ。

そう言えば聞こえは良いが、爵位なら上級種族になれば自動的に付いてくる。

「…え」

レイニーリオは俺の名前を聞いて驚いたのか、目を見開いた。

「本当だ？」

「ああ」

「…あの約500年前の“魔王決戦”の時の“シュヴァルツ・クラウディオス”？」

あの戦い、“魔王決戦”なんて呼ばれているのか。

それにしても、俺がプレイしていた時代から約500年も経過した世界に来てしまっているとはな…。

これは色々な常識がズレてしまっているかもしれない。

…もしかして、通貨の価値も、か？

「…でも、確か大戦の後に…」

レイニーリオは俺の無言を肯定と受け取ったのか、眉間に皺を寄せて考え込んでいる。

「あの……」

「何だ」

かく、舌と出るか凶と出るか。

「僕に戦い方を教えて……いや、僕の師匠になつて貰つて……」

「……は？」

……レイニワオの言葉は、またも予想を遥か斜めに超えていた。

act . 5 a v a r i c e 2 (後書き)

『所持品』

【日記】：途中書きの誰かの日記。

【スキルブック】：様々な能力を取得できる魔法書。あるだけ複製した。

【ロープ】：何の効果があるか分からぬロープ。フード付き。

【金貨】：一枚10000G。ガルド20枚程拾つた。

「…理由を教えて貰おうか」

やはり、俺はこの世界で有名だった様だ。

だが…何故師弟に繋がるのか分からぬ。

そこまで悪名ではないのか…？

「…僕のお父さんがレジスタンスのリーダーなんです。

」の町を支配してゐる貴族が重税掛けたり、勝手に決まりを作つたり、とにかく酷い事になつてゐるんです」

「…だから親が認めるぐらい強くなつて参加しようと思つてゐるのか？」

先程よりも低い俺の声に、レイニーリオは怯えながら頷く。

俺は師弟関係を結んだ事なんてないし、人にモノを教えるのも得意ではない。

断ろうと思つたが…その目には強い決意が宿つていた。

俺は、昔…その目をした奴を知つてゐる。

ソイツは …

…放つて置けない、か。

俺はハア…と溜息を吐くと声を戻す。

「…良いだろ？ 俺で良ければだが」

「それじゃあ…！」

「ただし、幾つか条件がある。それを守れないなら話は無しだ」

無言で首を縦に振るレイニーリオを見た後、人差し指を立てる。

一つ目：

「レジスタンスや役所側の戦力、作戦決行日の詳細と、俺が許可するまで介入しない事」

これは重要だ。

相手の戦闘方法によつて変えれば、その分有利に進む事が出来る筈だ。

それに、釘を刺しておかなければ、レイニーリオは今にでもレジスタ

ンスに加わりそうだった。

「一つ目…

「俺の事をバラさない事」

レイニーリオの反応を見る限りバレるとまずそいつだ。

…面倒な事は間違いない。

三つ目…

「最後に… 500年前のあの日から今までにあった事と、金銭の価値等の常識を知つてゐる限りで教えてほしい」

弟子を持つのは初めてだが、ゲーム内の知識はあるから少しほは教えられるだろう。

情報を得られるのは正直有益だ。

…レジスタンスに関しては、介入せられそつた気がするので知つておいて損は無いだろ？

レイニーリオは「クンと頷くと、奥の本棚からボロボロの分厚い本を取り出した。

「600年前から50年前ぐらいまでの歴史書です」

渡された本を開くと、古い本独特の臭いがする。

特殊スキルを使い、高速で読み進めると、歴史書に書かれている内容は俺の知っているものと違っていた。

魔王と対峙したメンバーは合っているのだが、俺が途中で裏切った事になつているらしい。

ソレに対し、俺以外のメンバーと俺のクランが抗議したが、王国によつてその声は抹消され、俺は一般人に裏切り者という認識をされているらしい。

当時、最強に近いメンバー揃いのクランのマスターであり、（主に）クランメンバーが悪知恵を働かせたせいで、色々な所にコネがあつた俺は表裏共に国一つ方手間で動かせる程の力を持つていた。

そういう点で、王国にとつてはかなり邪魔な存在だったのだろう。だから、裏切り者扱いにする事によつて俺を消そうとしたのじゃないだろうか。

昔はプレイヤーには使えない種族と言われ、NPCには魔族に似ていると嫌悪されていたから、そういう対象にするのは簡単だらう。それに、この世界の“俺”は、俺が作つて操作していたキャラじやないのか？

それにしては共通部分が多いが。

クラシックを作った時期やその他の行動は記憶と合致しているのに、一度戦争前後から食い違いが出てくるのはおかしそうである。

まるで魔王大戦から先のみをすり替えたかの様に…

「レイニーリオ」

「あつ、はい！」

「…何故敬語なんだ」

「僕の師匠だからですー。」

…まあ良いか。

「えーっと…次は金錢で良いですか？」

「ああ

「安い順に半銅貨、銅貨、銀貨、金貨、白金貨です

…同じだな。

「それぞれ硬貨のレートは半銅貨が100G、銅貨が1000G、銀貨が10000G、金貨が100000G、白金貨が10000Gです。ガルドガルドガルドガルド

まだ金貨と白金貨は見た事無いけれど……」

……。

なるほど、門番が驚いていたのも無理ないか。

いきなり百万円渡されたのと同じなんだからな。

……もしかして、俺をつけてきた奴らは渡した時を見ていたのだろうか。

それなら金銭目的でついてきたと合点できる。

「そういえば、昔はスキルブックといつもののが有つたらしげけど、今だと師匠が作った様な古参クランや、昔の遺跡、魔王城とかしか無いからかなり高価です」

……スキルブックが高級品になっているのか。

集めにくくなつていそがだな。

いや、そこも重要だが……

「…クランがまだあるのか」

「はい！　凄いですよね！」

王国に何度も解散させられそうになっていますが、その度に『此処はアイツが帰ってくるまで無くしてたまるか』と、クラン全員で抵抗しています。

数万の兵を派遣された事があったみたいですが、クランメンバーの3000人が一致団結して追い返したらしいですよ！

レイニーリオは目を輝かせ、握りこぶしを作りながら熱弁し始めた。

…俺の頃より人数が増えているのは気のせいだろうか。

「師匠は、上級国民や貴族、王国には悪の存在として嫌われていますが、一部の町、貧困民、奴隸、冒険者には非常に人気があって、貴重種族やベテラン冒険者が集まる有名なクランのマスターとして知れ渡っています。

魔王と対峙したメンバーが中心にクラン勧誘を積極的に…と言つても強くないと入れないみたいですが、しているお陰で人数が増えているらしいです」

…勧誘までしているのか。

ともかく、自分が作ったクランが残っていたのは正直嬉しい。

カード自体はギルドで作らなくてもクランでも作る事ができる。

…クランで作った方が良さそうだ。

気づかれたら攻防に巻き込まれそうだが。

まあ最悪、魔王城からスタートしたから全てが敵の可能性も考えたが、そこまでではなかつたのは幸だらう。

「クランマスターは誰がしているか分かるか？」

「今は竜人ドラグニルのクロス・ヴァンサイズという人がクランマスターをしています。

槍の達人で…確かに、仲が良かつたんですね？

彼は『ヴァルツが帰つてくるまでの仮マスターだ』って言い張つてるみたいです。

クラン本拠地は…確かにヴェルヘルムだつたと思ひます

良かった。

場所は変わつていなかつたか。

ヴェルヘルムというのは元々は緑と海に囲まれた町だつたのだが、

俺と数人が協力して立ち上げたクランをきっかけに、豊かな自然を残したまま王国の王都をも超える大都市に発展した町…のはずだ。

それにも…クロスの名前が出てくるとは。

クロスは魔王大戦の時に行つたメンバーの一人。

上級種族の竜人ドラグニルで、槍が得意武器だつたはずだ。

名前と種族を聞く限り…もしかしたら俺の様にこの世界に来てしまつたプレイヤーの可能性がある。

確かめに行く価値はある、か。

「大体把握できた。 レジスタンスの事を教えてくれ」

「えーっと…レジスタンスが結成された動機は、さつき言つた事と、この町を見てもらえば分かるんじやないかと思います」

確かに町の大通りは人通りも多く、活気に満ちていたが、一本外れると別の世界の様に閑散としていた。

町内で格差があるのか。

…物語ではよくある設定だが。

「そこで、前リーダーの人を筆頭にレジスタンスが結成されたので

すけど、どこからか情報が漏れたのかアジトがばれて…公開処刑されたらしいんです…。

当時、副リーダーだった父さんが再度レジスタンスをまとめて…前リーダーが立てていた計画の改良版を1週間後に決行するみたいです。

本当は殺し合ひなんて無ければ良いけど…王国は忙しいのか相手にしてくれないし、アヴァリスの奴はドンドン酷い事をしだすから、もう我慢の限界なんです」

レイニーリオは悲しそうに溜息を吐いた。

確かに無駄な殺生はしない方が良いだろうし、俺自身したくない。

日本で育つたらしい“俺”の思考はこの世界にとつて甘いモノかもしれないが。

それにも…

「…色々詳しいな」

俺は確かに知っている限り話して欲しいと言つたが、ここまで詳しく知る事が出来るとは思わなかつた。

寧ろ、大人と対峙しているみたいだ。

子供らしい所は時折見せる笑顔と… 碎けかけている敬語くらいか。

「はい、僕、昔から父さんに色々勉強させられましたから。

今回も『お前には未来があるから参加するな』の一点張りで…

…レイニーリオの父親の気持ちがわからないでもないな。

人を殺した事がない俺が言える立場じゃないが、それがどれ程苦痛な事か。

俺は泊めて貰う恩があるからレイニーリオにできる限り教えてやりたいが、レジスタンスに参加させるかどうかは迷う。

タイムリミットは一週間か。

…早めに決めないといけないと思つた。

act · 6 avarice 3 (後書き)

『所持品』

【日記】：途中書きの誰かの日記。

【スキルブック】：様々な能力を取得できる魔法書。あるだけ複製した。

【ロープ】：何の効果があるか分からぬロープ。フード付き。

【金貨】：一枚10000Gではなく、100000G。ガルド20枚

程拾つた。

ツ…！

誰かが呼んでいる気がして、俺は瞼を開く。

白い壁、黒い家具、漫画や小説が保管してある本棚に…パソコン。

目の前には俺の部屋が広がっていた。

ゲームの中よりもずっと平和で、科学が発達していく…俺が護る筈
だった家族がいる、大切な居場所。

だが…良く見慣れている景色と同じはずだといつのこと、何故か周り
の景色が色褪せて見えた。

おかしい、俺はゲームの世界から此処に戻りたかったはずだ。

何故…俺は戻れた事に安堵したり喜ばず絶している…？

て、…ツ…！

俺を呼ぶ声は、反響しているのが四方から聞こえてくる。

何かを伝えたいのだろうか、必死さは伝わるもの…辺りを見回しても誰もいない。

誰だ…何が言いたい…？

誰もいない部屋で呟くが、相手の声は部分的にしか聞こえない。

俺は聞き取りうと皿を綴じ、耳を澄ました。

「……………！」

突然の浮遊感に襲われた俺は意識を浮上させた。

飛び起きる様に上半身を起こすと、同時に何かに対する焦燥感にかられた。

しかし、それはすぐに收まり、普段の冷静を取り戻した俺は頭を振つて上がった呼吸を落ち着かせようと深呼吸をした。

何か…大切な事を夢の中でみた気がするのだが、記憶に霧が掛かっていて思い出せない。

「師匠ー、朝で……」

…せういえば、俺はレイニーリオの家の一室を借りていたな。

声のした席の方向に顔を向けると…レイニーリオは口を開け、目を見開いたまま固まっていた。

何故コチラを向いて固まっているのだらつか？

「…綺麗」

俺が怪訝に思つていると、レイニーリオは掠れた小声でさう呟いた。

俺はそれを聞き…ああ、と納得した。

寝る直前まで【変装】をしていたのを想い出した。

…といつ事は、レイニーリオが素の俺の顔を見たのは今が初めてか。

顔立ちが違うと言つたものの、顔のベースは俺だ。

それを欧米風にしてみただけだから鼻立ちや色や身長を変えただけなので若干面影はある。

だが…何故“綺麗”なんだ…？

「…俺だ」

「あ……いや……それは耳とか目とか肌の色で分かるんですが……」

レイニーリオは動搖しているのか目が宙を彷徨っている。

「何故顔が赤い?」

「とにかく、支度をするが。 今日は町に出る」

「はあ、はい……」

俺は空間から金貨一枚取り出し、ズボンのポケットに入れて立ち上がる。

レイニーリオが何かを言いたそうに俺を見ていた。

「あの……」

「何だ」

「……女性ですか?」

「違う、男だ」

女性だと思われたらしい。

そういえば、寝ている間に髪紐が解けていた。

だからなのだろうか。

レイニーリオは俺の返答に何故か意氣消沈していた。

「所で師匠、何で買い物を……？」

【変装】を使った俺はレイニーリオと町の表通りに出た。

レイニーリオは表通りをつらつらと走る門番に似た鎧男を見かける度に、嫌そうな顔をしてフードを深く被る。

確かに表通りと裏通りの格差は酷い。

この町の裏通りに住んでいるレイニーリオが嫌悪な表情をするのは当たり前だろう。

だが、俺の田舎地に行くにはこの道を通らなければ……行けない。

「俺とレイニーリオの武器と服が要るだろ？」

「武器は分かりますけど……服？」

俺は【広域感知】を見て方角は合っているか確認をしながら答えると、今一良く分からぬのか首を傾げた。

「俺の服は【変装】を使わないとスリに遭う可能性があるし、使つても初級だからばれる危険もある。… 昨日の奴らに目を付けられているだろうからな。

それに自分の身を守るモノは必要だろ?？」

レイニーリオは納得した様で頷いた。

人混みを避けながら暫くまっすぐ歩いた後、裏通りを進む。

複雑な道を間違えずに進めるのは【広域感知】があるからだ。

俺が向かっているのはある武器店。

寝る前に何処か良い武器店は無いかと【広域感知】で調べているときには気付いたのだが、魔人の特殊スキルの一つ【魔力感知】が併用して使える事に気がついた。

どうやら意識を向けると発動するらしく、マップ上の店に意識を向けると“魔力反応あり”と表示された。

他にも併用出来るかもしないと【空間】に入れておいた【ステータス表示】のスキルブックを読んで確かめてみた。

すると店内に置いてある物や店員の種族が表示された。

：個人情報まで表示されるモノだつたか…？

俺は疑問に思つたが敢えて気にしない事にし、魔力反応が強い店を探した。

武器は魔力が籠つていればいるほど強度が高く、切れ味が鋭くなつたり特殊効果が付与されていたりする場合がある。

その中でも郡を抜いて高いものは“魔剣”や“聖剣”と呼ばれる。防具にしても同様で、性能が格段に良くなる為、高いにこした事は無い。

勿論、値段も比例どころか反比例するのだが。

俺のクランが残つているという事は、俺の部屋に装備がある可能性があるが、無い場合や例のレジスタンスの抗争に巻き込まれるのを考えて早い内に装備を整えておいた方が良い。

何時何が起つるか分からぬから“過剰”と思つぐらいが丁度良いだろ？。

俺は出来るだけ込められた魔力が高い装備を探していた。

するとある一軒の店が田に留まつた。

店内に“高密度、高濃度の魔力反応複数あり”と表示されたのだ。

当たりだと思った俺は更に詳細を調べる。

店内にいるのは人間^{ヒューマン}で、今まで気に入った人にしか売った事が無いらしい。

…これは、武器スキル覚えておいた方が良いかもしない。

俺は【空間】から武器系スキルブックを取り出して読んでいて…寝てしまつたらしい。

その後の記憶が無いから多分そうなのだらう。

話が若干逸れてしまつたが、ともかく俺が向かつてているのはその例の店だ。

人混みを避け、大通りを暫く直進していき、右折して再び裏通りに入る。

そのまま何度も曲がり…件の店に着いた。

所要時間は体感で城の中ぐらいか。

「…此処なんですか？」

「ああ…入るぞ」

レイニーリオが怪訝そうな顔をしたのは無理もない。

“例の店”はレイニーリオの家より建て付けが悪く、何処を見ても店の筈なのに看板がないからだ。

俺はそのまま店のドアに手をかけ、押した。

リン…と来客を知らせるベルが鳴り、ドアが開く。

意外な事に思いの外中の空氣は澄んでいた。

店内を見回すと武器や鎧等が多種に渡つて棚に飾つてある。

店主がまだこの部屋にいなかつたので、先に商品を見させて貰おうと、剣を一本手に取つてみた。

剣は埃が全く付いてなく、酸化も劣化もしていない。

装飾はかなり少ないものの、その分実用性に長けていいる様で武器の良し悪しが余り分からぬ俺でも業物だというのが良く分かつた。

手入れはとても念入りにされていて…此処の店主は自分の作品に誇りを持つてるのは【ステータス表示】を見なくとも明白だった。

レイニーリオは憧れていたのか、武器を見る目が輝いている。

軽く150センチは越えていそうな大剣が鞘に入つた状態で壁に立てかけてあつた。

レイニーリオは気になつたのか持ち上げようとするのだが、重いのか微動だにしない。

「し、師匠…この剣無茶苦茶重いです！ 持つてみて下さいよ…。」

「動かせないほど重いのか？」と思つた俺は剣を元の棚に戻し、レイニオが持ち上げようとしていた剣の塚に手をかける。

力チャヤリ、という金属同士が擦れた音と共に刀心が表わになる。

「身長以外僕と体格変わらないのに…」

片手で持ち上げた俺を見てレイニオは泣きそうな顔になった。

「…正直俺も驚いているのだが。

軽く振つてみるも、そこまで重いとは思わない。

空いている手で腕を触れてみるが筋肉が付いた訳でもないらしい。

「…何故だ？」

魔人は…怪力だったのか…？
フインド

「…なつ…？」

カシャーンッ！…カラカラ

後ろで物が落ちた音がした。

振り返ると、中年の男が口をあんぐりと開けていた。

足元には男が落としたと思われる剣が落ちている。

男の目が剣と俺の間で迷つている。

…む、悪い事をしてしまった。

俺は大剣を鞘に戻し、立てかける。

「許可を取らずに大剣を振り回して済まなかつた」

足元の剣を拾うと謝罪の言葉と共に差し出す。

「…あ、ああ」

男は我に返ったのかハツとした表情をした後、ぎこちない動きで剣を手に取る。

そして、剣に目を落としたまま固まってしまった。

…謝り方が間違っていたのだろうか。

「おい、あんた」

俺が疑問に思つてゐると、男が声をかけてきた。

顔を上げると、男は真剣な眼差しで俺を捕らえていた。

「…ついて來い」

男はスッと視線を外すとそのまま奥の扉に向かつて行つた。

俺とレイニーリオは顔を見合わせ…男に着いていく事にしたのだった。

act · 7 avarice 4 (後書き)

『所持品』

【日記】：途中書きの誰かの日記。

【スキルブック】：様々な能力を取得できる魔法書。あるだけ複製した。

【ロープ】：何の効果があるか分からぬロープ。フード付き。

【金貨】：一枚10000Gではなく、100000G。ガルド20枚

程拾つた。

男… 店主に案内されたのは重厚な扉の先だった。

無言で促され、俺達は部屋の中に入る。

部屋の中は何処か倉庫の様で、先程の部屋と比べ頻繁に来ないらしく、少々重い空気が漂っていた。

【魔力感知】は【広域感知】の時は手動だが、通常は常時発動するスキルらしく、この部屋に漂う違和感を感じた。

この違和感が魔力なら… 探していたモノはこの部屋にある。

薄暗い部屋の中を店主は壁の蠅燭に火を付け、明かりをとる。

壁や棚には普通のとは違つ雰囲気を持つ武器と衣類があった。

「此処においてあるのは客が置いていった魔剣とローブだ」

見ただけでも凄まじい魔力が籠つていると分かるだろう…と店主は薄く苦笑し、扉を閉める。

それでも… 1つだけ群を抜いて… 異様なモノが…

店主は、俺の様子を見て納得したのか口角を上げながら部屋の奥を

指差した。

「あんたは……アレを如何にか出来るか?」

俺の先代から置いてあるが、あまりの禍々しさに近づけやしねえ。

アレを如何にか出来たら……この部屋の魔法具全部やる」

「……うう……？」

レイニーリオが思いつきり顔を顰め後ずさつたのも無理はない。

奥には、他のモノとは比べ物にならない程の危険な雰囲気を纏つた大剣があった。

俺の中で近寄ってはいけない、飲み込まれると警報が鳴っていたが……気がつくと棚に向かつて足を進ませていた。

レイニーリオだろうか、誰かが俺に向かつて叫んでいる気がするが、この時の俺には聞こえなかつた。

俺は棚のモノに手を伸ばして、触れた。

……触れてしまつた。

……気がつくと、俺は闇の中に一人立っていた。

目を開けているのか綴じているのか区別がつかない程に視界は闇一色で塗り潰されている。

だが、不思議と不安や恐怖は無かつた。

俺の……知らない筈の雰囲気が漂っているのに、逆に懐かしい感情を感じる程だ。

いや、俺は此処の事を知らない、知らない筈だ。

……俺が知ってるのではなく、俺じゃない“誰か”が知っている……？

その思考に反応するかの様に訳の分からぬ感情が俺の中で蠢く。まるでそれが……“誰か”が俺の中にいる事を表している様で……

気持ち悪い

そう思つた瞬間、今まで以上に“誰か”的感情が押し寄せてきた。

「くつ……つあ……！？」

堪えよつと歯を噛み締めるが…脳内をぐりぐりされんな様な酷い頭痛に口の端から声が漏れる。

降り掛かつてくる“誰か”の膨大な負の感情に段々に“俺”が保てなくなる。

徐々に“俺”的意識が薄れ、“誰か”に…

…、…、…、…

遠い、遠い所で俺の事を呼んでる奴がいる。

前方に弱々しく、だが強く光る金色が見えた。

ああ…お前か。

俺は苦しい筈なのに何故か頬が緩み…薄れゆく意識の中で光に向かつて手を伸ばした。

「師匠、師匠つ…！」

「…………ん？」

俺はこの世界で一番聞き慣れた声によって現実に引き戻された。

……いや、引き戻して貰つたと言つべきか。

「大丈夫ですか……？」

レイニーリオの心配そうな顔が俺を見上げていた。

「ああ」と頷いたが、レイニーリオは眉間に皺を寄せて何か言いたそうにしている。

俺は誤魔化す様にレイニーリオの頭をクシャリと撫でると、俺の行動が意外だつたのか目を見開いて頭を押さえた。

……驚いてばかりだな、レイニーリオは。

笑いを堪えていると、レイニーリオは頬を膨らませ、そっぽを向かれてしまった。

……ちょっと、やり過ぎたか？

当分コツチを向いてくれそうに無いレイニーリオを見て苦笑し、棚に向き直る。

先程の禍々しい雰囲気は随分薄れた大剣が鎮座していた。

「…つて、師匠触っちゃ…えつ？」

もう一度手を伸ばして触れてみるが…さっきの様に何かに飲み込まれる様な感覚はしなかった。

ただ、その代わりに…柄に触れた時だけ少しずつだが体力が盗られていつている感覚がする。

【ステータス表示】を使って分析すると…

「…ブラッド系の武器か」

独り言の様に呟くと、それを聞いた一人が怪訝そうな顔をする。

ブラッド系は装備者の体力…HPを代償に高い攻撃力を誇る魔剣の一種だ。

この武器の種類は短期決戦か余程体力に自信のある人以外は癖がありすぎて使われない武器だ。

体力はイコール生命力に繋がる。

効果が余り知られてなかつた実装当時は、攻撃力の高さに惹かれた人が使用し自殺行為をする者が後を絶たなかつたらしい。

「チラの世界では…死んだら生き返れないかもしね」

可能な限り使用は避けた方が良さそうだ。

俺は一部を誤魔化しながら教えると、一人の顔から血の気が引いた。

「そ……そんな物騒なもんだつたのか……」

店主は俺が持つていてる例の武器を眺めながら呟く。

店主は暫く何かを考えていたが、決めたのか俺に向き直つた。

「まあ、あんたは俺との賭けに勝つたんだ、魔法具を持つていけ」

「い、良いのですか！？ 魔法具つて一番安くても金貨数枚ですよ！」

レイニーリオは冗談だと思つていていたのか声を張り上げて困惑した表情をしていい。

「……そんなに高くなつてゐるのか、魔法具。

ブランド系なら納得できるが、いくらなんでも最低ランクの魔剣が金貨というのは高すぎる気がする。

もしかして、魔法具の流通量が少ないのだろうか。

「俺の店に置いておいても、これらの武器を使いこなせぬやつなんて早々こないだろ?」

これでも武器や防具を長年作ってきた俺だ、あなたがどれぐらい強いかは大剣の振り方をみりやあ分かった。

あんたは俺が会った中で一番つええし、一番危険そうな剣を扱って平氣そうに見える。

だつたら、あんたに託した方が魔法具にとつてもあんたにとつても良さそうだ」

店主は真剣な眼差しで俺を射抜く。

手に持つている剣はもう扱いさえ氣をつければ危険性は薄れたようだ。

周りにある武器や防具も少々異様だが、危険とまでは感じない。

俺は頷くと店主はあからさまにほつとした表情をした。

だが、どうやって持ち帰れば良いのだろうか。

この量は半端ではない。

【空間】二千二百キロまでしか入らないのだ。

「俺は使わねえだろ? から、これを使ってくれ

俺がどうしようかと思案していると、店主は皮で出来たリュックを持ってきた。

手渡されたが、どうすれば良いのか困っていると、レイニーリオが服を引っ張る。

「師匠、コレは師匠のギルドが生産して販売しているリュックです。

空間魔法が使われていて、見た目を無視した収納が可能です！」

何だと思つて少し屈むと、レイニーリオはそつ耳打ちしてきた。

俺はそう言われて納得する。

俺がゲームをやっていた頃にもそういうモノがあつたな。

専ら俺は【空間】を使つていたが。

リュックの中に武器や防具を入れてみると、黒い空間の中に普通に入つていた。

どうやら【空間】と同じ原理らしい。

違つ所は【空間】と違つて形がある事と他の人でも使用可能な所か。

入れている間、武器と防具の数を数えたり【ステータス表示】を使

つて調べてみた。

装備品はある一定の条件をクリアしなくては装備できない。

それはレベル、HP、MP、スキル…等がある。

貰つた武器は片手剣が一本、短剣三本、それにやつさのブリッジ系の大剣。

後はロープが三着分か。

ついでに装備条件を見て驚いた。

片手剣(1)

装備可能条件：HP1100 STR250以上

効果：STR + 12% DEF + 10%

属性：風 + 23

片手剣(2)

装備可能条件：HP3200 MP3000 STR500以上

【剣術スキル 初級】取得済み

効果：STR + 15% INT + 15%

属性：炎 + 25

これは別にいい。

魔法具なので属性がある事は普通だ。

属性は0から100まであり、100が一番高い。

属性が武器に付与していると、その類の属性系スキルが扱いやすくなったり、コスト無しで属性攻撃が可能になる。

逆に言つと、弱点の属性を持つ相手に当たると不利になるのだが、。

1本目は攻撃力に関係するSTRと防御力に関係するDEFが上がる。

条件の低さのわりに使い勝手の良い武器と言える。

2本目は条件の割にSTRがあまり上昇せず、魔法系スキルの攻撃力に関係するINTが上昇する所を見ると、攻撃しながら魔法系スキルを使う所謂“魔法剣士”タイプ用らしい。

短剣（1）

装備可能条件：HP 500 MP 400以上

効果：MP + 7% MN D + 5%

特殊効果：麻痺（敵）

属性：雷 + 13

短剣（2）

装備可能条件：HP 750 MP 800以上

効果：INT + 8% AGI + 7%

特殊効果：敏捷 +（装備者）

属性：風 + 16

短剣（3）

装備可能条件：HP 1500 MP 1500以上 【短剣スキル

初級【取得済み

効果：INT + 13% MND + 12%

特殊効果：幻影 + (敵)

属性：光 + 39

これも別に不自然な数値ではない。

短剣は前衛が好んで使うようなものではなく、後衛系スキルを好んで使う人が護身用…といつても頻度は高いが、その程度の武器なのでHPが少々低めに設定されている。

STR上昇が無い代わりに特殊効果がついているケースが高い。

“+”は無しから最大3つまであり、付いている程敵の場合発動頻度が高くなったり、装備者の場合効果が大きくなる。

MNDは回復魔法系スキルに関与し、HPの回復率に関わってくる。

AGIというのはつまり、回避のしやすさに関わってくるので… 2本目の短剣は敵の攻撃を躊躇したい人には打つてつけの装備と言える。

ローブ(1)

装備可能条件：HP 500 MP 500以上

効果：DEF + 10% INT + 7% MND + 7%

特殊効果：魔法系スキル効果UP + (装備者)

属性：光 + 14

ロープ(2)

装備可能条件：HP 800 MP 800以上

効果：DEF + 12% STR + 10%

特殊効果：敏捷 + (装備者)

属性：風 + 31

ロープ(3)

装備可能条件：HP 3500 MP 3500以上

効果：DEF + 16% STR + 5% AGI + 5% INT +

5%
特殊効果：隠密 + + (装備者)

属性：闇 + 49

ロープ系は装備箇所をかなり取ってしまう為、特殊効果で補助してあるのが多い。

だが、それはゲーム内の話だ。

俺が今いる世界は、似た世界観の“異世界”だらう。

此処まで現実じみた世界が…唯の夢だとは思えない。

話が逸れてしまつたが、俺が言いたいのは“ゲームの常識が通用しない”という事だ。

例えば…ゲームでは武器は基本一つ、スキルの【二刀流】が無いと二本装備できなかつたが、この世界ではいくつでも持てるのではないか?という事だ。

つまり…ローブの下にまた別の効果の装備品が着れる可能性があるという事。

もし出来るのなら、かなり勝敗に関わってくるだろう。

この店に来るまでに通行人の冒険者の装備を眺めていたが、そこまで高いものを装備していない所からすると、昔に比べて全体が下がっているのかもしれない。

ゲーム内基準だと少々不安な装備になりそなうだが、この世界ではこれだけあれば大抵なら何とかなりそうだ。

そこまでは良かつた。

なのだが…これはどうなのだろうか…?

名も無き魔剣

装備可能条件：HP100000 MP100000 全ステータス

1600以上 魔系種族

効果：HP + 25% MP + 25% 全ステータス + 25%

特殊効果：ブラッド+++（装備者） 变形+++（武器）

属性：闇 + 95

魔剣や聖剣と呼ばれるものは大抵名が付いている事が多いが、無い場合もある。

それは別に良いが…装備可能条件が異常すぎた。

ゲームの時と同じで考えるのは良くないとは思うのだが… HPやMPは9999、全ステータスは1500が高位種族の限界値だ。

装備で越える事は可能だが、装備条件は“素のステータス”が満たしていないといけない…筈なのだが。

それに…“魔系種族”…という事は魔族と魔人ファインドしか装備できないのか…？

…明らかに不可解な魔剣だった。

『所持品』

【日記】…途中書きの誰かの日記。

【スキルブック】…様々な能力を取得できる魔法書。あるだけ複製した。

【ロープ】…何の効果があるか分からぬロープ。フード付き。
【金貨】…一枚100000Gではなく、1000000G。^{ガルド}20枚
程拾つた。

【魔法具・片手剣】…様々な付加効果の付いている片手で持てるサ
イズの剣。一本ある。 new!

【魔法具・短剣】…様々な付加効果の付いている短剣。三本ある。

new!

【魔法具・ロープ】…様々な付加効果の付いているロープ。三着と
もフード付き。 new!

【名も無き魔剣】…魔剣としても明らかに異様な効果を所持してい
る魔剣。微かに近寄りがたい歪な雰囲気を醸し出している。
new!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3541x/>

二人の反逆者

2011年11月20日04時02分発行